抑うつ傾向と虚記憶の関係

— 概括的記憶のメカニズム解明に向けた予備的検討 —

○丹藤克也¹

(¹愛知淑徳大学)

キーワード: 抑うつ, 虚記憶, Remember/Know 判断

Effects of depression on true and false memory in the DRM paradigm.

Katsuya TANDOH¹

(¹Department of Psychology, Aichi Syukutoku Univ.)

Key Words: depression, false memory, Remember/Know procedure

目 的

抑うつ者が有する記憶の問題の1つに、自伝的記憶の概括化(以下, OGM)がある。OGMとは、具体性に乏しく、出来事を概括化した形で自伝的記憶を想起する傾向をいう。OGMと関連が深いと考えられる実験室的な記憶課題として、実際には提示されていない単語(クリティカル語)の虚記憶を高い確率で誘発するDRMパラダイムが挙げられる。DRMパラダイムにおける虚記憶の発生には、リスト全体的から意味や主題を抽出する、抽象化・概括化が関与している。また、OGMはソースメモリや意識的回想との関連が指摘されているが(Raes et al., 2006; Ramponi et al., 2004), DRMパラダイムで発生する虚記憶でもこれらの要素が重要な役割を果たしている。そのため、DRMパラダイムは記憶の概括化現象の機序を実験室的に検討する課題として利用価値が高いものと考えられる。OGMと類似した現象が、自伝的記憶以外でも認められるならば、DRMパラダイムでは記憶の概括化やソースメモリの低下により、抑うつ者で虚記憶の増加が予想される。実際、DRMパラダイムを用いた研究から、抑うつ者では、ネガティブ語や抑うつ関連語の虚記憶の増加が報告されている(Howe & Malone, 2011; Joorman et al., 2009)。

こうした実験的統制が比較的容易な課題を、臨床群だけでなく非臨床群だけが抑うつ傾向の高い者まで幅広い対象に適用することで、OGMの機序解明に大きく貢献できると考えられる。先行研究では対象が臨床群に限定されており、アナログ研究は行われていない。そこで、本研究では、非臨床群で抑うつ傾向が高い者でも、臨床群の抑うつ者と同様に虚記憶の増加が示されるのかを検討する。

方 法

実験参加者: 大学生および専門学校生 110 名が参加した。このうち日本語版 Zung の自己記入式抑うつ性尺度 (SDS: 福田・小林, 1973) の得点が 50 点以上を抑うつ高群 ($n=25$, 男性 8 名, 女性 17 名), 40 点未満を抑うつ低群 ($n=19$, 男性 14 名, 女性 5 名) とした。

刺激: 高橋 (2001) の情動価を考慮した基準表から 6 個の虚記憶リストを使用した。このうち 3 リストはクリティカル語が不快語であり、残りの 3 リストは中立語であった。中立語と不快語のリストは、虚再生率が同程度になるよう配慮した (中立語 = 36%, 不快語 = 38%)。各リストは提示されないクリティカル語を連想させる 15 項目で構成され、リスト項目は全てひらがな表記とし、プロジェクタで視覚提示した。

手続き: 実験は集団で実施した。まず抑うつ傾向を測定するために日本語版 SDS を実施した。その後、虚記憶リストを視覚提示し、リストの学習と再生を求めた。リスト項目は 2 秒間提示され、ISI は 1 秒であった。リスト項目の提示直後に、90 秒間の自由再生テストを実施した。また、再生した項目に対して Remember/Know 判断を求めた。リストの学習と再生を 1 試行とし、これを合計で 6 試行実施した。

結 果

抑うつ高群と抑うつ低群における正再生率、虚再生率を Table 1 に、Remember 反応率を Table 2 に示す。正再生率について抑うつ傾向 (高・低) × リスト情動価 (中性・不快) の分散分析を行ったところ、抑うつ傾向の主効果 ($F(1, 42) = 0.24, ns$), リスト情動価の主効果 ($F(1, 42) = 1.46, ns$), 交互作用 ($F(1, 42) = 0.079, ns$) のいずれも有意でなかった。次に、虚再生率についても同様に 2 要因の分散分析を行ったところ、抑うつ傾向の主効果 ($F(1, 42) = .33, ns$), リスト情動価の主効果 ($F(1, 42) = .69, ns$), 交互作用 ($F(1, 42) = .34, ns$) のいずれも有意でなかった。最後に、正再生と虚再生の Remember 反応率について分析を行ったところ、いずれの主効果および交互作用も有意でなく意識的回想の低下は認められなかった ($F_s < 2.33, ns$)。

考 察

本研究では非臨床群を対象としたが、臨床群を対象とした先行研究のように、抑うつ傾向による虚記憶の増加や意識的回想の有意な低下は認められなかった。今後は OGM の説明理論から影響が予想される諸要因、たとえば反芻傾向の個人差や、ワーキングメモリへの負荷と虚記憶との関係を検討し、臨床群と同様の傾向がみられるのか検討を進める必要がある。

Table1 抑うつ傾向, リストの情動価ごとの正再生率と虚再生率とSD

		抑うつ傾向	
		低	高
正再生率	中性語	0.58(0.12)	0.55(0.13)
	不快語	0.59(0.11)	0.58(0.13)
虚再生率	中性語	0.33(0.27)	0.29(0.22)
	不快語	0.26(0.29)	0.28(0.27)

Table2 抑うつ傾向, リストの情動価, 正再生, 虚再生ごとの Remember 反応率の平均とSD

		抑うつ傾向	
		低	高
正再生率	中性語	0.67(0.30)	0.64(0.36)
	不快語	0.65(0.32)	0.67(0.36)
虚再生率	中性語	0.50(0.60)	0.32(0.48)
	不快語	0.35(0.48)	0.38(0.48)

本研究は科学研究費 (課題番号 24653200, 代表: 杉山崇) の助成を受けて行われた。